



安田章生著

新古今集歌人論

桜楓社



「新古今集歌人論」

研究叢書 7

昭和三十五年三月十日 初版発行
昭和四十三年九月十日 三版発行

定価 六百八十円

著者 安田章生

発行者 南雲克雄

印刷者 樋口泰一

発行所 株式会社 桜楓社

東京都千代田区神田猿樂町二の五

電話(291)五六六〇〜二

はしがき

過去の日本文学について考えるとき、私がこれまでに最も強い関心を持ってきたテーマは、詩人といわれる人々の生とその作品との関係、あるいはその本質ということであった。そうした探究を通して、私は、自らの生を確かめたかったのである。

そういう私が、最初に選んだ詩人は、藤原定家であった。これは、学窓を出るとき、卒業論文のテーマとして選んだのであったが、そのとき、私は、あの平安時代から鎌倉時代へと転換する混乱のなかに生きて、新しい詩を追求確立した詩人の生そのものに、強く心をひかれていたのであった。定家に見出される詩の問題の多くは、その頃（昭和十二・三年頃）の日本の混乱に堪えて生きていた若い私自身のなかにも、そのまま存在しているように思われたのである。

定家について調べながら、私は同時に、定家と対照的な詩人である西行にも、心をひかれた。そして、学窓を出たあと、西行のことについても、自分自身の眼で確かめてみたいという欲求に駆られた。すでに太平洋戦争が始まり、私の身辺も落ち着かない日々の連続であった頃である。私は、西行を読む日が多かった。

その後、西行や定家と密接な関係のある俊成のことも、調べてみた。また、その当時の最も秀れた詩人の一人である式子内親王のことも調べてみた。そして、これらの詩人の究明を通して、私は、そこに自らの生と詩との問題が明らかにされてゆくような喜びを、味わったのであった。あるいはまた、とくに西行と定家という、異質の二大詩人のなかに、こんにちの詩の最も重大な問題も見出し得るように思ったのであった。

右の四名に比較するとき、当時のその他の歌人は、いずれもマイナー・ポエツトであつて、そこには問題性もまた乏しいように、私は考えている。しかし、それら諸歌人の姿にも、調べてみれば、乱代に生きた詩人群像が興味ふかく見出される。彼らもまた彼らなりに、当然のことながら、乱代における生と詩とを追求しているのである。本書において、「新古今集の歌人群」としてまとめた一篇に収めた七名の歌人たちは、それらの歌人中、私が秀れていると考えている人々である。

思えば、学窓にあるときに定家論を書いてから、早くも二十一年に近い歳月が、私の上流れようとしている。その間に、わずかながらも書いてきた詩人の姿を、いま、こうして一本にまとめる機会を得たことは、私にとつて感慨浅からぬものがある。私のささやかな探究が、私と同じような問題を新古今集の時代に見出される方々に、少しでも意味を持つことができるならば、うれしいと思う。

なお、この機会に、姫路高等学校（旧制）在学の頃以来、ご指導ご鞭撻を賜わってきた荒

木良雄先生、東京大学文学部国文学科入学当時以来、ご指導ご鞭撻を賜わってきた久松潜一先生、故池田亀鑑先生に、お礼の言葉をしるさせて頂きたい。また、本書をまとめ刊行するについてご鞭撻ご高配を賜わった小島吉雄先生にも、厚くお礼を申し述べたいと思う。

昭和三十四八月七日

著 者

新古今集歌人論

目次

はしがき	一
西行	九
藤原俊成	壹
藤原定家	貳
式子内親王	三
西行と定家	三七
俊成と定家	四二
新古今集の歌人群	五七
後鳥羽院	六〇
慈円	六六

藤原良経……………一三

寂蓮……………一七

藤原家隆……………一八

二条院讚岐……………一八

俊成女……………一九

日本文学における和歌の位置……………一七

——結論に代えて——

付録

新古今時代略年表……………二三

付記……………二五

西行

一、孤独の詩人西行

二、西行の歌の特色

三、中世詩人の一典型西行

一

西行

西行の伝記は、こんにち詳細には判明しないけれども、それでも遠い世の詩人としては、比較的よくわかつていてる方であろう。本名は佐藤義清（憲清、則清、範清とも伝わっている）。出家して法名を円位といい、また、大宝房（あるいは大本房）とも西行とも号した。父は、左衛門尉康清、母は監物源清経の女である。その先祖は、右大臣魚名公の五男、藤原藤成。俵藤太と号された藤原秀郷からは九代の孫にあたる。曾祖父公清の時から、家名を佐藤と称した。

このような家に生まれた西行もまた、重代の勇士としての名譽を傷つけない頑丈な肉体を恵まれていたらしい。若くして鳥羽院の北面の武士となったが、彼が弓馬をよくする剛勇の

士であつたことについては、台記（康治元年三月十五日の条）吾妻鏡（文治二年八月十五日、嘉禎三年七月十九日の条）等に、明証がある。後に天下の權を掌握した平清盛が、西行と同じく元永元年（一一一八）に生まれ、若くして共に北面の武士であつたことを想起するとき、西行の武門としての門閥と剛勇とを以てすれば、彼もまた彼なりに、平安末期の動亂の波をくぐつて、現世的な栄達の道をはかることは、それほどむずかしい業ではなかつたといわねばならないであらう。だが、彼は、すでに種々の混亂を呈し始めていた平安末期の貴族社会をあとに、保延六年（一一四〇）十月十五日、突如として二十三歳の若さで出家遁世した。台記の前条には「家富み年若く、心に愁ひなし」と見られた西行が世を捨てたことを、人々は嘆美したりと伝えている。出家遁世は、当時の人々の心に虹のような憧れを描いてかかつていたとはいえ、なおかつ西行のような人間の遁世は、世俗の目には、美しいけれども不思議な行動と映つたのである。

この西行出家の原因については、当時の時代思潮を間接的な原因とすれば、直接的な原因として従来二つのこと、一つは崇徳院へのご同情、一つは失恋が考えられている。悲劇的な生涯を過ごされた崇徳院と西行との暖かい魂の交感のほどは、彼の歌にも美しく見出されるところであるが、西行出家の年の前年に崇徳院の異母弟にあたられる体仁親王がお生まれになり、崇徳院の薄幸の運命が始まつたということを想起すれば、このとき早く十七年後の保元の亂を、西行はその敏感な脳裡にまざまざと描き出し、時代の暗い行手をただ一人のぞき

見たものの恐怖に、人知れぬ戦慄を禁じ得なかつたに違いない。あるいはまた、源平盛衰記が伝える、身分違いのための失恋事件も、わが身をかずならぬ身として嘆いている悲恋の歌が、切々たる真情をこもらせて彼の歌のなかに多く見出されるところからして、単なる伝説以上の真実をわれわれに物語っていると見て、少しも差支えはないであろう。だが、これらのことがまことに西行出家の原因であるとしても、問題はやはりその事実にあるのではなく、こうしたことが出家遁世の原因とならずにはおかなかつたほど、彼の心を深く傷つけたらしいということにある。末世觀的無常感、厭世感に蔽われていた時代環境も、崇徳院をめぐる皇室内部における暗雲も、西行ひとりが体験したところではなかつたし、失恋もまたこの世においてありがちのことといわねばならないであろう。ただ、これら当代としてはありふれたことを、おそらく踏切台として、若き西行は世を捨て、そこに詩人としての彼の個性を光らせているのである。いまは、

世にあらじと思ひたちける頃、東山にて人々寄霞述懐といふことを詠める

そらになる心は春の霞にて世にあらじとも思ひたつかな

世をいとふ名をだにもさはとどめおきてかずならぬ身の思ひ出にせむ

と詠じて、青春傷心の身を自虐しよう⁽²⁾と決意した彼は、

鳥羽院に出家のいとま申し侍るとて詠める

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

と、惜しむべくもないこの世を遁れることによつて、自らの生を養おうとする。「身を捨て
る」以外に「身を助ける」道のないことを、若き詩人は自らの宿命として知っていた。現世
的生活のなかにあつて生ける屍となるか、現世的生活を断ち切つて生を養うか、西行は後の
道を選んだのである。詩人というものは、いつでもその心の奥深く、眞の自由人となろうと
する憧憬を、人一倍強く持つてゐる種類の間人である。そのような詩人の精神史の青春の時
期に、一種の亡命が何らかの形をとつて決行されるということは、おそらく免れ得ないこと
であろう。西行は、世を捨て、その孤独をさらに徹底させて、ただ己が心のみを己が主とも
し友ともする境涯に、眞の自由人となろうと欲したのである。

牡鹿鳴く小倉の山の裾近みただひとりすむわが心かな

この出家後まもない頃に詠んだと思われる歌には、一種の安らかさが感じられる。「ただ
ひとりすむ」の「すむ」は、「住む」と「澄む」との掛詞。人間を離れ、鹿の声を聞きつつ、
ただ一人住んでいる境涯に、澄みゆく孤独の心——「ただひとりすむわが心」こそ、西行が
かねてから願ひ求めていたところであつたといえよう。

西行のその後の五十年間という長い人生は、こうして、隠遁孤独の境涯のなかに展開す
る。自然は、そこで一層生き生きと、その美しい姿を、彼の前に現わしてくる。

世を捨てて谷に住みける嬉しきは古巢に残る鶯の声

わがものと秋の稍を思ふかな小倉の里に家居せしより

山里に家居をせずば見ましやは紅深き秋の梢を

自然への親近感を深めた彼にとっては、いまは、水の音も友となり、

水の音はさびしき庵の友なれや嶺の嵐の絶えま絶えまに

月も友となり、

ひとり住む片山かけの友なれや嵐に晴るる冬の夜の月

眺むるに慰むことはなけれども月を友にてあかす頃かな

ひとりすむ庵に月のさしこずば何か山への友にならまし

あられも友となり、

音はせて岩にたばしるあられこそ蓬の窓の友となりけれ

雪も友となり、

降りうづむ雪を友にて春待てば日を送るべきみ山への里

鶯も友となり、

春のほどはわが住む庵の友になりて古巢な出でそ谷の鶯

鹿も友となり、

あはれなりよもよもしらぬ野の末にかせきを友に馴るる住みかは

松も友となつた。

わがそのの岡べに立てる一つ松を友と見つつも老いにけるかな

しかし、すべてこのような自然を友とする一見安らかな彼の表情のうしろに、孤独な人間がその深いさびしさのかげをのぞかせていることを、われわれは読み取らねばならないであろう。自然を友としての安らぎが、彼に全くなかったなどというのではない。しかし、よく見れば、右にあげたような歌のモチーフになっているものも、じつは自然愛のなかに息づいている人間思慕の声ではないか。全く自然愛のなかにひたり切ってしまった人間にとつては、人間思慕の歌声などは、一つの甘い感傷にすぎないかもしれぬが、彼においては、自然へ親しく呼びかける歌声は、そのまま人間思慕の声となつて、反響してくるのである。この人間思慕の声が、彼の孤独への徹底を甘いものにしていて、というならば、そういえないこともない。けれども、このような彼であつたからこそ、その孤独のおもひは一層痛烈であつたことを、われわれは見のがすわけには行かないであらう。

西行の心のなかで、絶えずひとすじの糸を引いていた人間思慕と、それゆえに湧きくる厭世の心――

何事にとまる心のありければ更にしもまた世の厭はしき

ひとすぢに思ひ入りなむ吉野山またあらばこそ人もさそはめ

行基菩薩のいづれの所にか一身を隠さむと書き給ひたることを思ひ出られて

いかがすべき(新古今集)
いかにせむ世にあらばやは世をも捨ててあな愛の世やと更に思はむ(新古今集)